

『西鶴諸国はなし』研究史ノート(1)

——昭和20年以前の作品評価——

宮 澤 照 恵

目 次

- 一、はじめに
- 二、昭和20年以前の研究史通観
 - 1、△明治△大正△ 文壇人主導による作品紹介と本文校訂
 - 2、△大正末年△昭和初年代△ 研究者による研究と低評価の定着
 - 3、△昭和10年代△ 基礎的研究の進展と新たな方向への模索
- 三、作品評価をめぐって
 - 1、評価の諸相
 - ア、水谷不倒
 - イ、鈴木敏也
 - ウ、片岡良一
 - エ、山口剛
 - オ、近藤忠義
 - カ、野間光辰
 - 2、戦後研究への課題
 - ア、低調作品説
 - イ、人間主義的評価
- 四、おわりに

一、はじめに

西鶴の研究史を通観する論考は、昭和16年の滝田貞治『西鶴襍藁』・『西鶴の書誌学的研究』を始め、昭和39年の暉峻康隆「研究史通観」『西鶴』（研究史大成）、昭和44年谷脇理史「西鶴研究史」『西鶴』（研究資料叢書）、平成6年荒川有史「西鶴文学研究史」『西鶴人間喜劇の文学』、平成8年竹野静雄「西鶴の影響と享受」『西鶴事典』など、様々な意識を持ってまとめられてきた。

『西鶴諸国はなし』に限定した場合、いまだ戦前からの研究史を通観したものはない。研究史を紹介・概観する論考は二、三備わるが、何れも戦後から説き起こすのが常である。その理由を付度するに、昭和20年以前には本書を扱う論考自体が極めて少なかったこと、及び戦前の研究のエッセンスは、戦前からの研究をまとめた暉峻康隆『西鶴評論と研究』、野間光辰『西鶴新攷』・『西鶴年譜考証』に継承されたと考えられたことが挙げられよう。或いはまた、本書に対する戦前の評価は「低調作品説」が支配的であったことから、その時代の研究を掘り起こ

キーワード…本文校訂・低評価・題材主義・人間主義

しても立ち向かうべき新たな問題は見つかりそうにない、という思惑が働いているようにも思われる。「低調作品説」からの復権も果たされつつある現在では、戦前の研究はすでにその役割を果たし終え、今日に繋がるような見るべき問題は残っていない、というのであろう。

しかし、戦後の研究が戦前の研究を踏まえたものである以上、研究の流れを俯瞰的に整理・理解し現在の位置づけを行うことは、不可欠なはずである。「研究史ノート(1)・(2)」では、いくつかの観点を通して戦前における研究の流れを整理し、必要に応じて継承・発展、或いは解消の足跡にも触れたいと思う。戦前になされた問題提起のうち今日に繋がる課題については、掘り起こした上でその解決の糸口を探っていきたい。なお、個々の文献については本文では簡略に示し、末尾に「引用文献書誌」を付すこととする。

二、昭和20年以前の研究史通観

『諸国はなし』に関する戦前の翻刻・注釈・研究を通観すると、西鶴作品としての認知は一応あるものの、刊行年次が定着するのは大正末年以降(後述)であり、好色本・武家もの・町人ものへの関心に比べて、本書への関心は多くはないことが知られる。雑話集であるとして軽視され、西鶴研究の中心的テーマたりえなかったのである。論述に先立ち、まずは明治・大正から昭和前期に至る研究の概略を、私に三つの時期に分けて把握しておきたいと思う。

1、明治～大正

文壇人主導による作品紹介と本文校訂

(一四)

近代の作家による明治20年前後の西鶴復興の機運は周知のことであるが、こうした中、明治23年10月、江鳥生(水谷不倒)が『延葛集』に「井原西鶴の著書」として『諸国話』を挙げたのが、本書を取り上げた最初のものである⁹⁾。これに続く大正期までの研究は、「文壇人主導による作品紹介と本文校訂(翻刻・書誌研究・概説)の時期」と位置づけられる。

明治27年5・6月には、帝国文庫『校訂西鶴全集』上・下の刊行(7月発禁)により、本書(ただし巻四の二まで。巻数ほかに原本との異同あり)を含む西鶴本十七編が翻刻紹介された。紹介・翻刻ともに、他の西鶴本に数年遅れるものであった。明治40年以後になると、抜粋本も含め翻刻紹介が進む。明治40年3月『校訂西鶴全集』(平民書房)、明治43年12月『第二西鶴集』(国書出版協会)、明治44年3月『元禄時代小説集』下(国民文庫刊行会)などが早い時期のものである。続く校訂本については省略に従う。

ところで、この時期の本文校訂は何れも四巻本を底本とするものである。『元禄時代小説集』下の古谷知新による「緒言」に、

此書大久保氏の浮世草子目録には、貞享二年版五冊とあれども、予の得たる紅葉山人の所蔵なりし写本は四冊にして、其出版年代また確証を得ざりしをもて、暫く未詳とす

とあるように、「浮世草子目録」の記述にもかかわらず、四巻本を底本として出版年代未詳のまま西鶴作品群の最後尾に配されるのが常であった。

書誌研究の遅れた理由の一つは、五巻揃った伝本が少ないことにある(古谷の言う「紅葉蔵の写本」は措いて、現在確認されている諸本

を見て、京大本・東洋文庫岩崎本は巻五が写本の取り合わせ本である。明治期から大正10年頃までは「冊数・刊年とも不明」とする状態で、大正期に至っても存疑本として扱う概説が見られた。一例を挙げると、大正9年に刊行された鈴木敏也『西鶴の新研究』では、「四巻二十二話。刊行年代不明」とした上で、西鶴本と認めうる「多少の証左が認められる」としている。初めて頭注が付された藤井紫影『西鶴文集』（大正2年 有明堂文庫）も、底本は四巻本である。完本並びに刊年が認知されるのは他の西鶴本よりはるかに遅く、大正9-11年の水谷不倒・鈴木敏也による集大成を俟つことになる。

水谷不倒は、大正9年『浮世草子西鶴本』において五巻本を紹介し、奥付の写真を付した。ここに至って初めて刊年が定まるとともに、挿絵・版下についても自筆自画説が提示された。続いて鈴木敏也は、大正11年『近世日本小説史』前編の総論において、『西鶴の新研究』における先の記述を訂正し、本書を五巻本として扱った。

この段階でようやく『西鶴著五巻本』であることが定着し、刊行時期も定まったかに見える。しかし、大正15年刊の片岡良一『井原西鶴』には、相変わらず「完本が発見されず刊年不明」とあり、昭和初年代の翻刻にも四巻本を底本とするものが見られる。このように長い間テキスト未整備の状況であったことは、『諸国はなし』研究の特殊性として認識しておくべきであろう。

2、大正末年～昭和初年代

研究者による研究と低評価の定着

大正末年から昭和初年代にかけては、それまでの文壇人主導の書誌紹介・作品概説の段階から抜け出て、作品論・書誌・語彙考証の各方

面に及ぶ、研究者を主体とした新たな研究段階を迎える。翻刻事業も盛んに行われた。

大正15年刊の片岡良一『井原西鶴』（前掲書）を始めとして、昭和4年には大正期の論文をまとめた水谷不倒の『新撰列伝体小説史』、山口剛による詳細な解題を付した『西鶴名作集』下が相次いで出される。この三者の位置づけをすれば、前年代から続く水谷不倒の基礎研究の上に立って、新たに山口剛と片岡良一がこの時期の研究を拓いた、という関係になろう。当代の有識の読者の読み方を第一とする山口と、大正から昭和初期の文学観を前提とした文芸論的な読みを打ち出す片岡との対照的な研究の方向は、以後の研究者に多大の影響を与えることになる（それぞれの体系の中で展開された『諸国はなし』論の内容については、第三節「作品評価」の各論に譲る）。

書誌的研究では、大正後期の完本提供を承けて山口剛が、「生前出版で西鶴の名を冠する浮世草子作品が異例であること、三つの題を持つこと、署名入り本が存在すること」などを疑問視し、書誌的問題から成立論に展開していくきっかけを作った（前掲解題）。大正9年に出した水谷の「自筆自画版下説」は、この時期には定説に至っていない。

語彙考証の面にも、研究の一分野として自立していく兆しが見られた。本書が直接取り上げられることはなかったが、東京における三田村鳶魚らの輪講⁴⁴や、京都における藤井乙男らの輪講⁴⁵が、古典解釈学を推進した。昭和3年には佐藤鶴吉が、西鶴と近松の作品から広く語彙を採取した『元禄文学辞典』をまとめた。この辞典によって、語釈が進んだだけでなく、主要西鶴語彙の用例検索も可能になった。

こうした昭和初年代の研究者を主体とした動きの中で、『諸国はなし』の校訂本・注釈書の刊行も一つのエポックを迎える。昭和4年、東京帝国大学本を底本とした土井重義責任校訂『井原西鶴集』（新釈

日本文学叢書)によって、詳しい頭注を付した五巻本が初めて提供されたのである。

一方、実作者・文壇の側からのアプローチも衰えてはいない。大正15年に真山青果が巻一「大晦日は合はぬ算用」を脚色した戯曲「小判拾壹両」を発表し、昭和3年には正宗敦夫の『西鶴全集』三(日本古典全集)に四巻本が収録された。昭和6年には、久保田万太郎による『現代語西鶴全集』六に四巻本が収録された。

3、昭和10年代

基礎的研究の進展と、新たな方向への模索

昭和10年代には引き続き注釈書が刊行され、書誌的研究や語彙考証も進展してその成果がまとめられる。総じてこの時期は、それまでの書誌研究の集大成と、語彙研究とに傾いた時期と言える。作品論では、前年代の「低評価」を切り崩す新たな切り口が模索され提示されたが、十分には熟さない時期であった。

注釈書では、昭和14年刊行の近藤忠義『西鶴』(日本古典読本)が注釈と評論とを併載し、典拠論・作品論双方に新しい方向を打ち出した。『諸国はなし』に触れた部分も多く、歴史社会学に裏打ちされた「人間主義」が、その作品論に顕著に現れている(第三節「作品評価」各論参照)。

書誌的研究では、滝田貞治の三部作(昭和12年『西鶴襍俎』、昭和16年『西鶴襍稿』・『西鶴の書誌学的研究』)により、西鶴書誌の刷新が図られた。『諸国はなし』については、前年代の書名をめぐる山口剛の問題提起を進め、題名・柱刻などから「現存諸本は再版改題である」として、成立問題に発展する問題を投げかけている(なお、この

(一六)

問題は戦後、「西鶴諸国はなし」は再版名とする再版説の暉峻康隆と、水谷の紹介した署名入り本の存在を疑う初版説の吉田幸一との間の応酬に発展する。その後諸本の精査が進み、現在では「貞享2年版の早印または再印本である」という結論に落ち着いている。題名は、出版に先立ち外題のみ急遽「西鶴諸国はなし」に変更したと考えられている)。

昭和15-16年には稀書複製会による複製本が刊行される。大正15年刊の『好色一代男』、昭和2年刊の『好色一代女』(いずれも愛鶴書院)などに較べて大分遅れたが、ようやく原本に近い形でテキストが提供されることになった。

語彙考証では、前年代の輪講や『元禄文学辞典』の流れを進展させて、昭和12年から18年にかけて真山青果が、「語彙考証」を『中央演劇』・『西鶴研究』三に分載発表する。この分野は後に、前田金五郎・由井長太郎らによって継承・発展し、杉本つとむの西鶴語彙研究などにも影響を与えていくことになる。

訓古注釈の方法に沿った語彙考証は、解釈を定める上で不可欠なものである。その一方で事実探索という使命を帯びており、「事実に基づく創作」という作品理解や、露伴以来の「写実性」に注目する立場と通底する一面を持つ。考証学が読みの方向性を規定すると言いつてもよからう。後の、より専門分化していく過程では、現実との密着性を前提とする考証学と、創作方法や作為を読み解こうとする作品研究との連携は、困難を伴う場合が見られる。今後の課題の一つである。

作品研究の個別論文に目を向けると、昭和17年に野間光辰が「西鶴のはなし序説」を発表し、それまでの西鶴研究を吸収した上で、片岡・山口・近藤とは異なる新たな作品論を構築する端緒を開いた(第三節

「作品評価」各論参照）。この論文は、後に「はなしの方法」と改題改稿され、戦後の研究に大きな影響を与えることになる。

実作者の側からは、昭和14年に佐藤春夫が本書巻五の二・四の二・五の一の現代語訳を含む『打出の小槌』を発表、昭和19年には太宰治が巻一「大晦日はあはぬ算用」を翻案した「貧の意地」を発表した。

以上、明治から昭和19年までの研究史を概観した。以下では、「作品評価」・「典拠論」・「俳諧性」の三つのテーマに絞って個別の研究を位置づけるとともに、今日に繋がる問題点を掘り下げていきたいと思う。なお、「研究ノート（1）」では「作品評価」を、「研究ノート（2）」では「典拠論」・「俳諧性」を扱う。

三、作品評価をめぐって

1、評価の諸相

ア、水谷不倒

前述したように、『諸国はなし』を初めて西鶴本として紹介し、「貞享2年刊」本を発掘して自画自筆本と認めたのが水谷である。西鶴研究における水谷の功績の一つは、大正9年に前掲『浮世草子西鶴本』を著し、西鶴本全体にわたって書誌学的達成を示すとともに、作品それぞれの特質を炙り出して西鶴研究の基礎を築いたことである。『諸国はなし』に対する評価は、「不自然な妖怪談にはあらで、人事の上」に奇異不思議と思はるる事柄を集めたもので、「地方気分」に満ちている」とするもので、当初から本書の持つ現実性・奇談性・諸国性に注

目している。

昭和4年刊の『新撰列伝体小説史』（前掲書）では、

『御伽婢子』のごとく荒唐無稽の奇怪のみを捕へたものでなく、むしろ事実としても有りうべく、しかも奇にして珍なる話を集むるが主となつてをる。……実際の観察からきたもので、奇談ではあるが決して怪談に属すべきものではない

とする。前著に較べると現実性がやや強調されているが、基本姿勢は変わらない。概説紹介のレベルに留まるもので作家意識に踏み込んだものではないが、本書の性格をよく捉えていると言えよう。

イ、鈴木敏也

研究者による西鶴研究書の刊行は、鈴木敏也によって始まる。『諸国はなし』について、大正9年11月刊『西鶴の新研究』（前掲書）では「刊行年不明、存疑四卷本二十二話」とする。百物語の系統における秀れた作品とし、精細な筆を言う。

大正11年刊『近世日本小説史』前編（前掲書）になると、刊行は貞享2年と明示、「百物語系に位置するが、個々の咄は巷談・奇談・怪異談に亘る。題材の上では在来のもとの差がないが表現上の手腕が突出している」と説く。

可笑味も凄味もまた諷諧もそれぞれに享受させる事が出来る。ここに彼の特色があり強味がある。最も多方面に活動した時代に当たって、この一篇は、ある一方を代表する嚆標である。

と述べ、「巷談に怪異性を加えたり、史上の人物を世話ものにくんだり、また怪異題材に好色の味付けをほどこしたり転合化したり」という『諸国はなし』の自在な叙述を、本文引用と解説とによって具体的に示した。大枠では概説の域を出ないものの、水谷不倒の解説を一步進め、本書における西鶴の表現力・筆力を高く評価した点に特色がある。

ウ、片岡良一

大正15年3月刊『井原西鶴』(前掲書)では、「低調な作品。百物語系の小咄集。現実的なトーンをもった説話に閃きが窺えるものがあるが、それ以上は期待できない」という捉え方で、現実性については一定の評価をするものの、作品としての評価は極端に低い。片岡のいう低調作品説の論拠は、「題材主義と作品のリキミのなさ」、すなわち「奇談・小咄集」であることと「文体の軽さ・平明さ」の二点に集約される。人格主義的な視点を持ち文芸学を展開する片岡からすれば、人間の現実生活との必然的関係や統一的な主題を持たない作品への評価は低くなる。片岡の昭和前期の西鶴研究に与えた影響は大きく、この頃から『諸国はなし』低調作品説が表面化していくことになる。

片岡は、作品鑑賞をもとに作家の創作心理を追究し、西鶴を総合的に論じる中で、本書の執筆時期についての疑義を提示する。すなわち、「作品の展開は作家の成長変化と重なり合うものであり、西鶴は最終段階において平明素直な文体に至る」と捉える彼の創作史論からすると、本書が武家物に先行するのは不自然ということになる。そこで、貞享2年刊行を疑うのである。鑑賞眼を第一とした論で、今日から見れば無理な結論である。だが、大正末年当時本書は稀覯本で、複製本も出ていない。「貞享2年」の刊記を持つ完本が紹介されたのは大正

(一八)

9年であるが、執筆時片岡自身は完本を見ていない⁸⁾。片岡説は、書誌的研究が研究者の共通基盤たりえなかった時代の限界であったと言わざるを得ない⁹⁾。

なお、上述の「作家的成長変化説」は、暉峻康隆に継承される。ただしその後の研究の進展により貞享2年初刊が確定すると、片岡の唱えた創作史的意義は一部で修正を余儀なくされる。本書を低調作品とする側に立つ研究者は、作家的成長説とは別なところにその根拠を求めていくことになるのである。

エ、山口剛

前掲の『西鶴名作集』下解題その一では、志怪の書の流行に倣ったものとしながらも、「教訓を避ける。博識を衒はない。更に不思議のことのみを伝へない。むしろ怪談としては現実の色が濃い」などの点において、当時の志怪の書とは異なる西鶴の独自性を積極的に認めている。序文の「都の嵯峨に四十一まで大振袖の女ありこれをおもふに人はばけもの世にない物はなし」を取り上げ、現実色が濃い奇談異聞の書とする。

同書解説その二では、十八章にわたって問題を掘り下げ、それぞれの作品評価を打ち出している。『諸艶大鑑』から『諸国はなし』への推移には、『諸艶大鑑』における『宇治拾遺物語』の利用が介在している」という新見を示し、作品の構想や執筆契機を巡って、片岡の「作家的成長説」とは異なる立場を示した。一方では、本書を独吟2万3500句成就の疲労の中で書かれた題材主義の低調な説話作品とし、見聞の主の不在を欠陥と見る。この評価は、立場を異にしていたはずの片岡良一の低調作品説を、さらに強調した形である。

その一が概説にすぎず、その二が作品論である、という性格の違い

を考へても、「怪異性・教訓性に走らず現実色が強い奇談集」として本書を評価するその一と、「軽く貧弱な低調作品」と断ずるその二とは、その姿勢が大きく異なる。変化をもたらした直接の要因は今詳らかではないが、山口が「小説における俳諧性」という切り口によって、西鶴研究に新たな方向性を打ち出そうとしていたことと無関係ではあるまい（ただし山口の中で『諸国はなし』は、『一代男』・『諸艶大鑑』とはジャンルを異にする作品と捉えられていたようであり、「大矢数の後の休養期間中に筆をとった軽いもの」という認識は、その二に一貫している）。

本書の俳諧性については、「即離の技を見せる咄の配列」及び「宇治拾遺を母胎とする構想」の二点を指摘している。「編集」と「本説」の二側面に初めて注目したのである。しかし論が十分に熟することなく、新しい切り口と作品評価とは乖離したままであった。山口の捉えた俳諧性については、「ノート（2）」で改めて論ずる予定である。

山口の評価以後、本書の「軽さ」は「貧弱・低調」と同義に扱われていくように思われる。

オ、近藤忠義

前掲『西鶴』では、『諸国はなし』は「自由なものの方を見方をはぐくもうとする新しい町人の知的欲求に応えようとする」もので、「封建的な視野の狭さや固陋な見解に対する激しい抗議がある」と説く。序文からは、「世間は広いのだ、こんな珍奇な話もあるものなのだ、視野を広げて広い世界を見よ」という主張を読み取り、そこに新しい題材や主題の探求、合理主義思想・人間主義思想が見える、とする。

各話に沿って概略すれば、修練による成果に人間の可能性や人間の力を信じる近世的な考え方を読み（二の一・四の六）、女主人公の貞

操観に注目し（四の二）、或いはまた武士への賛美を読み取り（一の三）、伝承の近世化（二の一・四の五・三の四）に新しい開放された人間意識を見る、というものである。

近藤の作品論は、それまでの「低評価」を一変させる、「町人社会の解放の文芸」という歴史社会学派的な新しい視点を持つものであった。その内容と意義については、「研究史ノート（2）」において、典拠論・俳諧性の側面から改めて検証することとする。

昭和10年代、真山・野間・滝田らは歴史社会学的な視座による作品分析に加わらない立場を通し、近藤の研究は、暉峻康隆『西鶴 評論と研究』上（前掲書）に受け継がれる（「戦後研究への課題」参照）。

カ、野間光辰

野間光辰は、昭和17年前掲『西鶴のはなし序説』を発表。「はなしらしさ」を西鶴浮世草子の特徴として指摘した。後に展開する「はなしの方法」の出発点である。作品に見る「諧謔・風刺」や、全体を貫く「明るさ」と「穏やかさ」は、「はなしの姿勢」で書かれたことに起因すると説明し、西鶴が咄の名手であったこと（『見聞談叢』の記事）をその裏づけとして提示した。この論文は、「短編小説の集合」であること、「諸国咄」であること、「雑話物」であること、「現実性」が色濃いことなど、それまで西鶴作品の特徴とされてきた要素をすべて吸収して、新たな体系化を志向したものと言えよう。

野間論文を昭和10年代の研究状況の中においてみると、近代小説性のみが評価されたこと、及び雑話作品低調説が広がったことへの反措定であったと捉えることが可能である。「題材主義の低調作品説」への抵抗の一つの形であり、具体的には「軽さ」に対する独自の価値の発見を目指したものと見えよう。前年代の鈴木敏也の、「叙述によっ

て題材をいかようにも料理している」という、表現力に注目した論考を継承発展させた論でもある。

「奇談性・題材主義・文体の軽さ・飛躍・笑い」などといった、それまで本書を低く評価する根拠であった要素のすべてが、「話芸性」という視座を導入することによって逆転する。低評価作品をプラス評価に転化させる切り口の発見であった。野間は、「人間主義的評価」に対しても、直接議論を挑むことなく切り抜けている。近藤忠義のいう「社会的意欲」・「近世町人の知的要求」を、「はなしの要求と好奇心」に摩り替えてみせたのである。

しかし、「はなし序説」は個別の作品分析や創作意識に及ぶものではない。「はなしの姿勢・はなしの気分」が西鶴作品全般に見られる、とする総論にとどまる。文字通りの序説であった。ただ、野間の念頭に『諸国はなし』があったことは間違いない。ここでは、論文の最後の部分を引用しておく。

「武家物」・「雑話物」に属する作品は、その「好色物」・「町人物」に対して傍系的作品とせられ、単に彼の世界の多面的複雑性を示すものとして軽く扱われているけれども、……作家西鶴とその芸術を全き理解にもたらずためには、改めてそれに属する作品を見直し、その西鶴の於ける意味を正しく把握しなければならぬ。そしてそれは、西鶴のはなしという観点からなし得るものと思う。

以上、本書をめぐる戦前の評価について考察した。

水谷不倒が本書を紹介して以降、大正期には表現に着目する論もあったが、大きな進展を見せることなく概説紹介に留まっていた。すなわ

(110)

ち、当代の怪異書とは異なる百物語系の奇談集と捉え、現実性・諸国性・奇談性を評価するという、いわば消極的プラス評価である。

その後、「低調な作品である」というマイナス評価が大正末年の片岡良一『井原西鶴』を契機として急浮上したこと、昭和前期にはこの評価とは一見対立する近藤忠義の「人間主義的主張への賛美」によって積極的プラス評価がなされたこと、及び昭和17年には野間光辰によって新たな評価軸が導入され始めたことなどを確認した。

次項では、昭和前期の研究に大きなうねりをもたらした片岡・山口と近藤による対照的な評価、及びそれらを超えようとした「はなしの方法」が戦後研究に及ぼした影響について、触れておきたいと思う。

2、戦後研究への課題

ア、低調作品説

戦後研究を大まかに図式化すれば、一つは戦前の「低調作品説」を母体として、そこからの離脱、すなわち作品の復権をめざす方向に進み、もう一つは「人間主義思想の有無」という評価軸から脱却して新たな価値基準を打ち立てようとする方向に進んだ、と捉えることができる。片岡と近藤による相異なる二つの評価軸は、昭和23年に発表された暉峻康隆『西鶴 評論と研究』の二本の柱として取り入れられた。昭和前期の評価が、戦後研究の出発点に改めて提示されたことになる。

その後、「咄・共同体・説話・俳諧性・典拠離れ・たくらみ」といったキーワードを核とした研究が成長していったが、これらは何れも、作品評価のための方向性を模索し、前代の研究を乗り越えようとする中から育ってきた切り口であった。前述した野間の「はなしの方法」

はその前哨であるとともに、昭和20年以降昭和期の研究を方向付けるものでもあったのである。「低調作品説」超克の諸相のうち、「ノート（1）」では、「はなしの方法」の展開を取り上げておく。

野間、戦後この論を「西鶴の方法」と改題して発表し、更に「西鶴五つの方法（一）〜（七）」に結実させる。その間、延宝期に咄が流行したことや、『西鶴諸国はなし』が「咄の本」としても享受されていたという『書籍目録』による傍証が加わり、「はなしの方法」を西鶴の本質的方法の一つとする説は定着する。『諸国はなし』は、「はなしの方法」を展開する上で格好の題材となった。昭和50年には宗政五十緒『西鶴諸国はなし』の成立により、本書を「咄台本の集成」とみる説が出るに及んだ。一方で、『二十不孝』を扱った論ではあるが、井上敏幸「西鶴の方法？」により、「咄の点取り」の中から成長していった作品の存在を認めようとする動きも出る。

昭和30年代に野間説から分化して主流となったのが、森山重雄による「共同体文学論」である。これも根本のところでは、『諸国はなし』低調説からの復権を求める動きであった（ただし、「はなしの方法」が共同体文学論の指標となった時点から、「はなしの方法」そのものの追究は「咄の場」や「共同の文学」へとそそいでいき、昭和17年の段階で持っていたはずの緊急課題は忘れられていく）。

その後、江本裕らの「近世的説話」を注視する段階を経て、昭和40年代以降には、本書独自の価値の発見や低調作品説からの復権を目指す矛先は、「創作意識の解明」に向かう。詳しくは「ノート（2）」に譲るが、「典拠研究」や「俳諧性の解明」を媒介にして、論者の問題意識に基づく「方法論・構想論」の深化に向かうもので、作品ごとの創作意識に迫ろうとする動きである。いずれも「はなしの方法」を念頭におきながら、それを克服しようと試み、作家主体の追究に力点を

移していったのである。その中で、「はなしの方法」が本来内包していた文体研究や語り手の問題、咄の享受のありかたなど、多くの問題が積み残された。近年には、「はなしと主体的作家活動による創作とを同列に論じることが可能なのか」、という根本的な疑問が出され、原点に立ち戻ろうとする動きがでてくる。

以上、戦後の『諸国はなし』研究の根底には、片岡・山口・暉峻と続いた「低調作品説」を梃子として、文学作品としての復権を目指す意思があったことは間違いない。当初「はなしの方法」は一つの指針となり、次にその拡大利用があり、更には克服に向かったのである。

イ、人間主義的評価

戦後の『諸国はなし』研究を方向付けたもう一つの流れとして、「自然主義的解釈と作品評価」からの脱皮を図ろうとする方向がある。暉峻康隆『西鶴 評論と研究』によって、戦後研究の出発点に改めて提示された「人間主義思想の有無」という評価基準を乗り越え、本書の新たなおもしろさを積極的に抉り出そうとする志向である。例えば、序の「人は化け物」という表現を巡っては、人間に対する深い洞察と人間の可能性を読む近藤・暉峻を越えるべく、新たな解釈が試みられた。⁰⁰

しかし、人間主義的評価に対しては、直接的な反論を明示しにくい事情があった。人間主義をいう側も『諸国はなし』全体を正面から取り上げたわけではなく、本書のいくつかの咄を取り上げて評論しているにすぎない。従って反論する側も、対象作品ごとの創作意識を論ずる外はない。一方で、研究の主流が主題論よりも典拠論や方法論の方向に移ったことも、評価をめぐる論争が表立っては行われなかった一因であった。

これまで注釈書や論文の一部を割いて新・な・解・釈が試みられてきたが、「人間主義的評価」は、水面下では現在もお影響力を持ち続けている。すなわち、巻四「忍び扇の長歌」に封建社会を告発する女を読み新しい女性の生き方をみる(『近世小説』研究資料『日本文学』)、同「力なしの大仏」に人間の力への信頼を読む(松原秀江「西鶴諸国はなし考」、巻一「大晦日はあはぬ算用」に武士の義理への賛美を読む、といった解釈が、完全には覆されることがないのである。¹¹⁾

言うまでもないが、これらの作品の中では、人間のプラス面だけではなくマイナス面も同時に形象化されている。例えば、「大晦日はあはぬ算用」の義理を重んじる武士も町人に対しては横柄であるし、「忍び扇の長歌」の姫は、身分の低い年下の醜男を選ぶ変人として描かれる。一話の中に、一つの方向性だけではなく対立項をも用意しているのである。そうした点も視野に入れた上で、改めて諸注釈に受け継がれている読みの拠ってきたところは何か、別な解釈の可能性はないのかを議論する必要がある。

本書五巻三十五章のうち、研究論文や高校国語教材などにおいて具体的に取り上げる作品が、右の「大晦日はあはぬ算用」と「忍び扇の長歌」に限定される傾向にも、「人間主義的評価」の根強い影響が見られる。昭和51年11月刊『西鶴』(鑑賞日本古典文学)の本文鑑賞でも、この二作品が取り上げられている。高校の国語教科書に採択される本書の咄が限定され、教材研究もそこに集中する、という循環が続いているのである。その源をたどれば、「作者の主張」の有無を尺度とし、「新しい人間像」を肯定的に論ずるのに都合の良い咄を佳作としがちな、昭和10年代の「人間主義的評価」に行き着く。

同時代に思いのほか読まれた形跡のある本書のうち、組上に載せられる二、三編のみが鑑賞に値するというのでは、作品理解そのものに

問題があるという外はない。どのような作品論を展開するにせよ、また教材として何を取り上げるにせよ、当代の咄本や諸国はなし群・説話集などに較べて、本書三十五話の何がどうおもしろいのかを、先入観を取り除いて抉り出す作業が改めて求められている。

四、おわりに

本稿では、戦前の『諸国はなし』研究の流れを概観し、「評価」のありようを中心として個々の研究を検証した。併せて「戦後研究の課題」の項を設け、それぞれがどのように継承され発展していったか、或いは残された問題は何かを考察した。西鶴研究全体との連動を前提として、その上で、『諸国はなし』研究史の特殊性を炙り出すことができたと考ええる。「研究ノート(2)」では、「典拠論」と「併諧性」とを取り上げる予定である。テーマに即して、戦前の研究成果や問題提起を更に掘り下げ、今日に繋がる諸問題の解決への糸口を探っていきたいと思う。

注

- 1、昭和54年 箕輪吉次「作品別西鶴研究史」(『国文学』24-7)、平成10年 有働裕「西鶴はなしの想像力」、平成18年 宮澤照恵「西鶴諸国はなし」(『西鶴と浮世草子研究』1)が備わる。これらはいずれも戦後を出発点とし、暉峻康隆の『西鶴 評論と研究』から説き起こしている。
- 2、ただし刊年は不詳とする。
- 3、昭和9年の改訂版にて追補、五巻本となる。

- 4、大正15年4月 三田村鳶魚らにより『好色五人女』の第一回輪講が行われ、『彗星』第一年第四回―五回に掲載された。この輪講は昭和7年まで行われ、後に『西鶴輪講』（青蛙房）に収められた。
- 5、『語艶大鑑』を対象とした藤井乙男・頼原退蔵らによる輪講で、昭和6年1月より12月まで『上方』に掲載された。
- 6、天理図書館編『西鶴』、江本裕編『西鶴』桜楓社、宮澤照恵『西鶴諸国はなし』成立試論―書誌形態を通して（『国語国文学研究』115）、宮澤照恵『西鶴諸国はなし』諸本調査報告―先後と版行状況（『北星学園大学経済学部北星論集』38）などにより、書誌調査が進んだ。
- 7、明治23年5月 幸田露伴「井原西鶴」（『国民之友』）に、「人の心内の現象を其のまゝ、実事の如く写し出せる場合を以て多しとなす、写実派と云はむこと当れるに近かるべし」とある。魯庵や露伴らが指摘した西鶴の写実性は、その後の西鶴研究に様々な形で継承され、影響を与える。「写実性」をめぐる議論については、別な機会に触れたいと思う。
- 8、片岡良一は、「今日なおその完本が発見されず、……制作年代の不明のもの」とされている」として、朝倉無声が『小説年表』で貞享2年刊とした根拠を疑っている。
- 9、昭和4年10月 山口剛（前掲書解題その二）に、「以上の解説中、再版、三版をいふのは寓目し得た範囲内のことである。他に多くの版本があるべきであらう」という付言がある。
- 10、宮澤照恵 前掲注1論考参照。昭和30年代には岸得蔵が、序に示された珍しい事物がすべて事実に基づくことを説明していく。その後、湯澤賢之助・森田雅也がそれぞれの解釈を示し、飯倉洋一は「人化け物」の読みを転換して見せた。

- 11、宮澤照恵「西鶴諸国はなし大下馬の原質(一)―力なしの大仏をめぐる」(『江戸の文事』)において、人間主義的解釈を否定し、「軽口ウソ咄」として論じた。
- 12、ただし最近では、『西鶴集』（鑑賞日本の古典 昭和55年 尚学図書）で「大晦日はあはぬ算用」とともに、巻一「公事は破らずに勝つ」・巻五「提灯の朝顔」も採択されるなど、例外が出はじめている。
- 13、平成12年9月 宮澤照恵 前掲注6「『西鶴諸国はなし』諸本調査報告―先後と版行状況」参照。

引用文献書誌

注に記載した文献を除き、項目に沿ってほぼ紹介順に列記する。なお、*印は『西鶴研究資料集成』（平成5 クレス出版）による。

一. はじめに

- 昭和16年 滝田貞治 『西鶴襟裳』・『西鶴の書誌学的研究』 白帝社
- 昭和39年 暉峻康隆・野間光辰編著 「研究史通観」 『西鶴』 国語国文学研究史大成11 三省堂
- 昭和44年 谷脇理史 「西鶴研究史」 『西鶴』 研究資料叢書 有精堂
- 平成6年5月 荒川有史 「西鶴文学研究史」 『西鶴人間喜劇の文学』 こうち書房
- 平成8年12月 竹野静雄 「西鶴の影響と享受」 『西鶴事典』 おうふう
- 昭和23年 暉峻康隆 『西鶴 評論と研究』上 中央公論社（下は昭和25年）

二、昭和20年以前の研究史通観

- 昭和23年6月 野間光辰 『西鶴新放』 筑摩書房
 昭和27年 野間光辰 『西鶴年譜考証』 中央公論社
- 昭和3年 (昭和50年9月 『真山青果全集』第4巻 講談社)
 昭和3年 正宗敦夫 『西鶴全集』三 日本古典全集刊行会 (京都大学蔵四巻本による)
- 昭和6年 久保田万太郎 『現代語西鶴全集』六 春秋社 (四巻本による)
- 昭和14年 近藤忠義 『西鶴』 日本古典読本 日本評論社
 昭和12年 滝田貞治 『西鶴襟俎』 白帝社
 昭和16年 滝田貞治 前掲 『西鶴襟俎』
 昭和16年 滝田貞治 前掲 『西鶴の書誌学的研究』
 昭和15-16年 『西鶴諸国はなし』 稀書複製会 米山堂
 昭和12年2月-13年1月 真山青果 「語彙考証」 『中央演劇』 (昭和51年8月 『真山青果全集』第16巻 講談社)
 昭和18年1月 真山青果 「語彙考証」 『西鶴研究』三 (前掲 『真山青果全集』第16巻)
 昭和17年 野間光辰 「西鶴のはなし序説」 『西鶴研究』一 台湾三省堂 (前掲 『西鶴新放』に「西鶴の方法」と改題改稿して所収)。
 昭和14年 佐藤春夫 『打出の小槌』 書物展望社
 昭和19年9月 太宰治 「貧の意地」 『文芸世紀』 (昭和20年1月 『新釈諸国噺』 生活社)
- 昭和23年 野間光辰 「西鶴の方法」 前掲 『西鶴新放』
 昭和42年9月-昭和44年3月 「西鶴五つの方法 (一)-(七)」 『文学』 (昭和56年 『西鶴新放』 岩波書店)
 昭和50年9月 宗政五十緒 「『西鶴諸国はなし』の成立」 『西鶴論叢』 中央公論社
- 昭和23年10月 江鳥生 (水谷不倒) 「井原西鶴の著書」 『延葛集』五 彌遠永会 (筆写回覧誌)
 * 明治27年5・6月 『校訂西鶴全集』上・下 帝国文庫 博文館
 * 明治40年3月 『校訂西鶴全集』 平民書房
 * 明治43年12月 『第二西鶴集』 国書出版協会
 * 明治44年3月 『元禄時代小説集』下巻 国民文庫刊行会
 * 明治44年3月 『元禄時代小説集』下巻 国民文庫刊行会
 * 明治44年3月 古谷知新「緒言」 前掲 『元禄時代小説集卷』下
 大正9年2月 鈴木敏也 『西鶴の新研究』 天佑社
 * 大正11年 鈴木敏也 『近世日本小説史』前編 目黒書店
 大正2年5月 藤井紫影 (乙男) 『西鶴文集』上 有朋堂文庫
 大正9年 水谷不倒 『浮世草子西鶴本』 水谷文庫 (昭和49年 『水谷不倒著作集』一 中央公論社)
 大正15年3月 片岡良一 『井原西鶴』 至文堂 (昭和54年 『片岡良一著作集』一 中央公論社)
 昭和4年5月 水谷不倒 『新撰列伝体小説史』 春陽堂 (昭和49年 『水谷不倒著作集』一 中央公論社)
 昭和4年10月 山口剛 『西鶴名作集』下 (解題) 日本名著全集刊行会
 昭和3年 佐藤鶴吉 『元禄文学辞典』 芸林舎
 昭和4年 土井重義 『井原西鶴集』 新釈日本文学叢書十 日本文学叢書刊行会
 大正15年5月 真山青果 「小判拾壹両」 『演劇新潮』、昭和9年初演

三、作品評価をめぐって

- 昭和23年 野間光辰 「西鶴の方法」 前掲 『西鶴新放』
 昭和42年9月-昭和44年3月 「西鶴五つの方法 (一)-(七)」 『文学』 (昭和56年 『西鶴新放』 岩波書店)
 昭和50年9月 宗政五十緒 「『西鶴諸国はなし』の成立」 『西鶴論叢』 中央公論社

- 平成5年6月 井上敏幸 「西鶴の方法2」 『西鶴を学ぶ人のために』
世界思想社
- 昭和32年5月 森山重雄 「咄の伝統と西鶴」 『文学』（昭和35年
『封建庶民文学の研究』 三一書房）
- 昭和40年8月 江本裕 「西鶴における説話的方法の意義」 「国語国
文学研究」一（平成17年7月 『西鶴研究——小説篇』 新典社）
- 平成6年 荒川有史 前掲 『西鶴 人間喜劇の文学』
- 昭和58年10月 浮橋康彦 「西鶴諸国はなし」 『近世小説』 研究資
料日本古典文学 明治書院
- 平成13年7月 松原秀江 「『西鶴諸国はなし』考——心と自由と自
然のかかわりについて」 『説話論集』十 清文堂
- 昭和51年11月 暉峻康隆他 『西鶴』 鑑賞日本古典文学 角川書店